

## 生活科教科書の比較・分析

～学習指導要領の改訂に伴う「人とのかかわり」に焦点を当てて～

布谷 光 俊 (愛知教育大学生生活科教育講座)

堀田 和 也 (愛知教育大学大学院)

野田 敦 敬 (愛知教育大学生生活科教育講座)

## Comparison and Analysis of Textbooks of Life Environment Studies

Mitsutoshi NUNOYA (Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education)

Kazuya HOTTA (Graduate Student, Aichi University of Education)

Atsunori NODA (Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education)

**要約** 平成10年の学習指導要領の改訂に伴い、生活科においては、身近な人々とのかかわりが一層重視されるようになった。そこで、生活科教科書の内容がこの10年間（平成4年度版と平成14年度版）で、どのように変化したかを「身近な人々とのかかわり」に焦点を当て、比較・分析したいと考えた。平成4年度版及び平成14年度版の5社の生活科教科書における身近な人々とのかかわりの場面数をカウントし、量的・質的に比較・分析を行い、今後の生活科教科書のあり方へ、若干の提言を行った。

**キーワード**：生活科，教科書，身近な人々とのかかわり

### 1 研究の目的

今春より、新学習指導要領が全面実施された。生活科においては初めての改訂である。総括目標の中の「身近な社会や自然」が、「身近な人々，社会及び自然」となり、人とのかかわりがより一層強調された。これは、少子高齢社会の進行，体験不足による自立の遅れ，地域社会の連帯感の希薄化，近年の目覚ましい国際化への対応など，子どもを取り巻く実態を考慮して，身近な人々とかかわることの重要性が示されたものである。これを受けて，生活科の各教科書も3度目の改訂がなされた。

そこで今回，学習指導要領の改訂に伴い，生活科教科書が平成4年度版から平成14年度版へ，どのような変化があったかを，「身近な人々」とのかかわりに焦点を当て，比較・分析することを目的とする。

### 2 研究の方法

平成4年度版と平成14年度版の教科書（5社）における人とのかかわりの場面数を以下のような手続きによりカウントし，量的・質的に比較・分析する。

分析の手続き

- ・人とかかわっている場面とは，「子どもが人と交流したり，人から何かを教わったりするなどの場面」とする。
- ・子どものかかわりの対象である人を，学習指導要領における「学校と生活」にかかわって，「教師」，「教師以外の職員」，「上級生」，「下級生」，「家庭と生活」にかかわっては，「母親」，「父親」，「兄

弟・姉妹」，「その他の家族」，「地域と生活」にかかわっては，「地域で働く人他」，「高齢者」，「障害者」，「外国人」，「保育士」，「乳幼児」に分類する。

- ・教師には養護教諭を含む。
- ・教師以外の職員とは，教師を除く，給食調理場等で働く人とする。
- ・下級生とは，教科書における主体が小学校2年生である場合の小学校1年生とする。
- ・その他の家族とは，子どもとかかわる対象が家族の中の複数人である場合とする。
- ・医者や警察官，バスの運転手，スーパーで働く人等は，地域に密着しているため，地域で働く人他を含める。
- ・高齢者には，自らの祖父母を含める。これは，教科書上では，祖父母と地域の高齢者との区別がつきにくい場合があり，かつ，祖父母とのかかわりの場面数は極めて少ないためである。
- ・友達とのかかわりの場面については，場面同士が複雑に重なっている場合が多々あり，カウントできないため，さらに，新旧の教科書ともに，非常に場面数が多いため，今回の分析対象には含めない。

### 3 結果と考察

#### (1) 全体的傾向

図1-1より，各社ともに，平成4年度用から14年度用へと，地域で働く人他，高齢者，障害者及び外国

人とのかかわりの場面数が全て増加している。つまり、これら4種を合計した、身近な地域の人とのかかわりの場面数は、各社大幅に増加しており、子どもと身近な地域の人とのかかわりを、生活科の重要な要素の一つと捉えていると言える。このことは、学習指導要領が改訂され、指導計画の作成にあたり、身近な人とのかかわりを大切にするよう明記されたためだと考える。4種の中でも障害者及び外国人とのかかわりの場面数については、5社ともに、平成4年度用では場面数0であったが、14年度用では数場面ずつ掲載されており、障害のある人とのかかわりや国際理解の必要性を意識した結果だと考えられる。しかしその場面数は、地域で働く人他や高齢者とのかかわりと比較すると極めて少なく、子どもが障害者や外国人をより身近に感じられるように、様々な場面でそれらの人々と自然にかかわっている場面を掲載すべきだと考える。

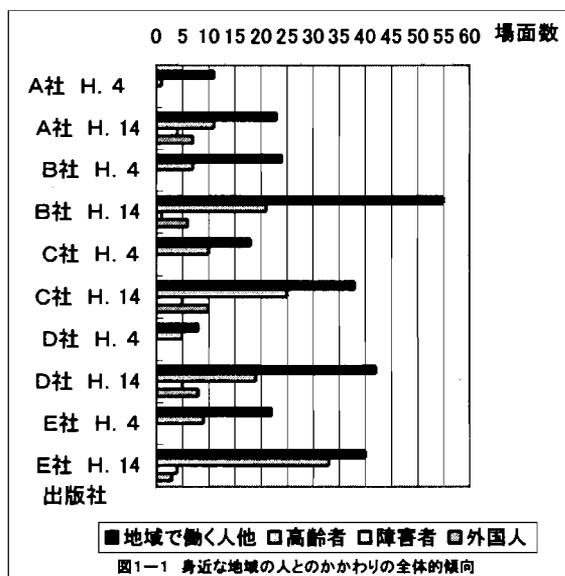
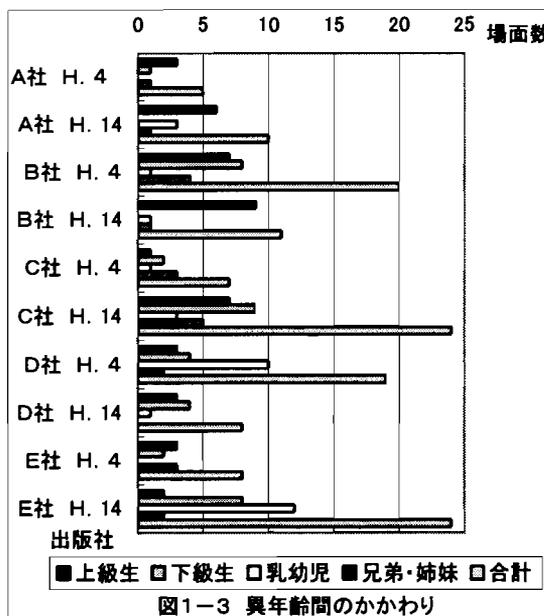
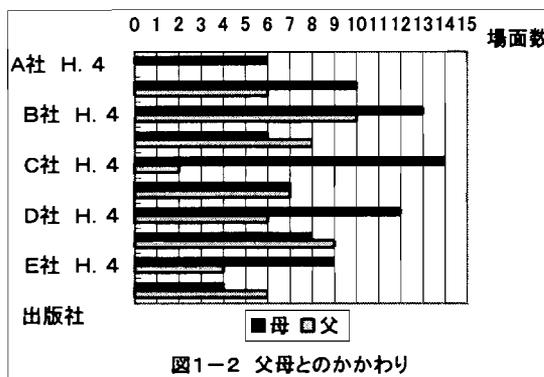


図1-2より、父母とのかかわりの場面数については、各社ともに、平成4年度用では母とのかかわりの場面数の方が父とのそれよりも多かったが、14年度用では父母の差が少なくなっており、その数が逆転している教科書もある。これは、男女平等意識の高まり、すなわち、父親の子育て参加や家事労働の分かち合い等の重要性により、子どもに父と母があらゆる場面で対等であることを意識させようとしたものだと考えられる。

図1-3より、自分と異なる年齢の子どもとのかかわりの場面数については、各社ばらつきがあり、A, C, E社は合計数が増加しているが、B, D社は減少している。かかわりの対象別に見ると、上級生とのかかわりの場面数はA, B, C社で増加しており、下級生はC, D, E社、乳幼児はA, C, E社、兄弟・姉妹はC社で増加している。従って、異年齢間のかかわりの場面については、各社ごとに重点を置く対象が異

なっていると言える。



## (2) 各社ごとの分析

### ア. A社

表2-1及び図2-1より、A社については、平成4年度用教科書に比べて平成14年度用では、地域で働く人他、高齢者、障害者及び外国人とのかかわりの場面数が増加しており、それら4種の合計は大幅に増加していると言える。よって、身近な地域の人とのかかわりを重要視していると考えられる。また、父母とのかかわりについては、父とのかかわりの場面数が平成4年度用の0から平成14年度用では6になっており、男女平等を意識した結果だと考えられる。さらに、上級生及び乳幼児とのかかわりの場面数が増加していることから、自分と異なる年齢の子どもとのかかわりも重要視していると言える。

### イ. B社

表2-2及び図2-2より、B社については、平成4年度用教科書に比べて平成14年度用では、地域で働く人他、高齢者及び外国人とのかかわりの場面数が増加しており、それら3種の合計は大幅に増加していると言える。特に平成14年度用教科書における地域の人

とのかかわりの場面数は、上巻下巻を併せて55場面と極めて多くなっている。よって、B社についても、身近な地域の人とのかかわりを重要視していると考えられる。また、父母とのかかわりについては、平成14年度用教科書になって父とのかかわりの場面数の方が多くなっており、B社についてもA社同様、男女平等を

意識していると考えられる。一方、下級生とのかかわりの場面がなくなっているが、これは、地域で働く人他とのかかわりの場面数の大幅な増加と併せて考えると、重要視する対象を地域で働く人他にシフトしたためだと考えられる。

表2-1 A社におけるかかわりの場面数

かかわりの対象	教師	教師以外の職員	上級生	下級生	母	父	兄弟・姉妹	その他の家族	地域で働く人他	高齢者	障害者	外国人	保育士	乳幼児
H4 1年用	18	2	3	0	2	0	1	2	2	0	0	0	0	0
H4 2年用	5	0	0	1	4	0	0	5	9	1	0	0	0	0
H14 上巻	24	0	4	0	3	1	1	2	9	5	3	2	0	3
H14 下巻	5	0	2	0	7	5	0	4	24	6	1	5	0	0

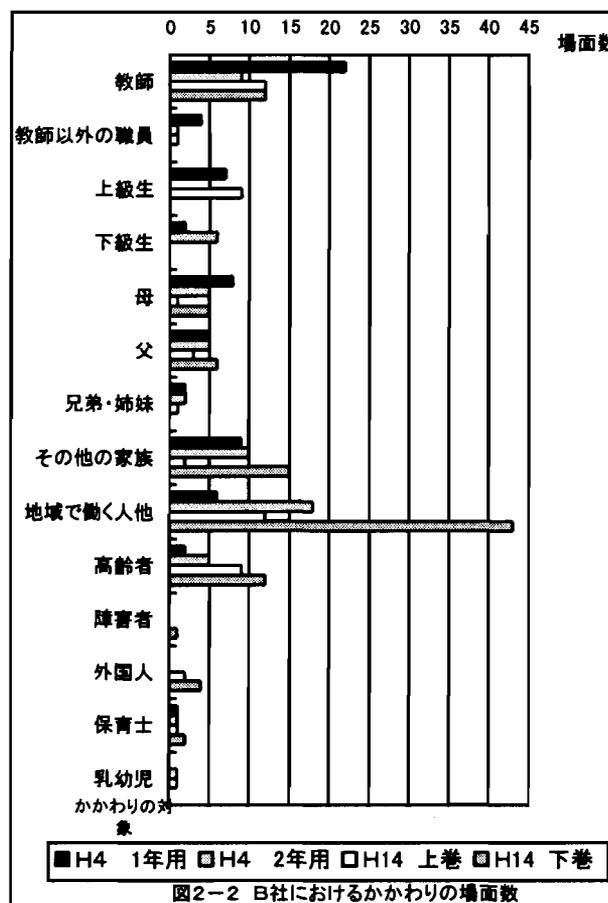
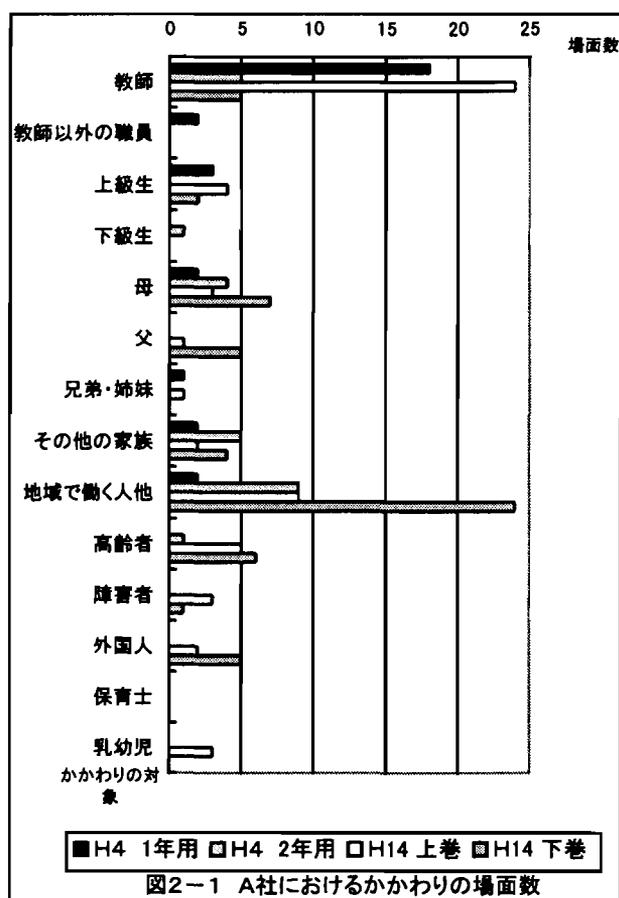
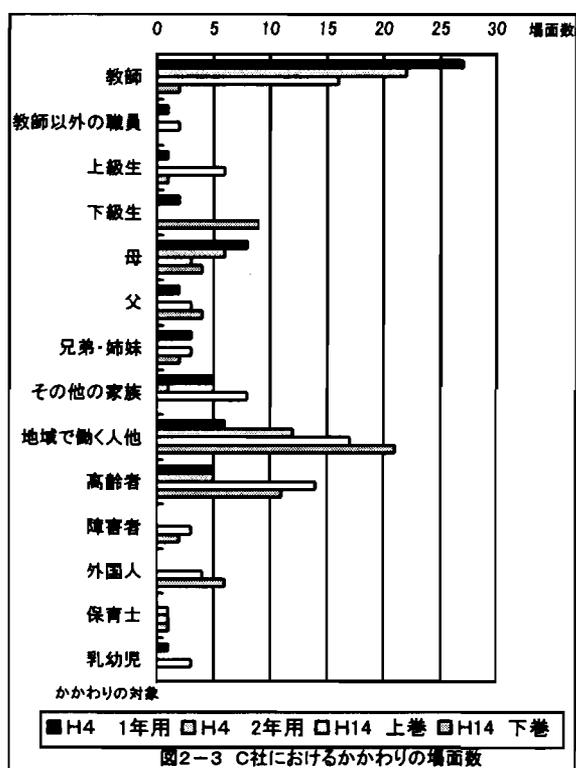


表2-2 B社におけるかかわりの場面数

かかわりの対象	教師	教師以外の職員	上級生	下級生	母	父	兄弟・姉妹	その他の家族	地域で働く人他	高齢者	障害者	外国人	保育士	乳幼児
H4 1年用	22	4	7	2	8	5	2	9	6	2	0	0	1	0
H4 2年用	9	1	0	6	5	5	2	10	18	5	0	0	1	1
H14 上巻	12	1	9	0	1	3	1	2	12	9	0	2	1	1
H14 下巻	12	0	0	0	5	6	0	15	43	12	1	4	2	0

表2-3 C社におけるかかわりの場面数

かかわりの対象	教師	教師以外の職員	上級生	下級生	母	父	兄弟・姉妹	その他の家族	地域で働く人他	高齢者	障害者	外国人	保育士	乳幼児
H4 1年用	27	1	1	2	8	2	3	5	6	5	0	0	0	1
H4 2年用	22	0	0	0	6	0	0	1	12	5	0	0	1	0
H14 上巻	16	2	6	0	3	3	3	8	17	14	3	4	1	3
H14 下巻	2	0	1	9	4	4	2	0	21	11	2	6	1	0



ウ. C社

表2-3及び図2-3より、C社については、平成4年度用教科書に比べて平成14年度用では、高齢者及び外国人とのかかわりの場面数が特に増加している。これは、近年目覚ましく進展している高齢化や国際化を強く意識したものだと考えられる。また、平成14年度用教科書では、母とのかかわりの場面数が半減する一方、父とのかかわりについては増加し、両者が同数となっており、C社についても男女平等を意識していると考えられる。さらに、上級生及び下級生とのかかわりの場面数が増加しており、C社では異学年の交流を重要視していると考えられる。一方、教師とのかかわりは大幅に減少している。これは、かかわりの対象の重点を、教師から多様な人々へとシフトしたためと考えられる。

エ. D社

表2-4及び図2-4より、D社については、平成4年度用教科書に比べて平成14年度用では、地域で働く人他、高齢者、障害者及び外国人とのかかわりの場面数が増加している。その中でも特に、高齢者とのかかわりの場面数が大幅に増加しており、高齢社会の進行を強く意識しながら、身近な地域の人とのかかわりを重要視していると考えられる。また、平成14年度用

教科書では、父とのかかわりの場面数の方が母とのかかわりよりも多くなっており、D社についても男女平等を意識していると考えられる。さらに、下級生とのかかわりの場面数が増加し、乳幼児とのかかわりについては場面数0から12へと大幅に増加している。これは、D社が異年齢の子どもとのかかわり、特に自分よりも年下の子どもとのかかわりを重要視するようになったと言える。

表2-4 D社におけるかかわりの場面数

対象	かかわりの対象	教師	職員 教師以外の職	上級生	下級生	母	父	姉妹・兄弟	その他の家族	他 地域で働く人	高齢者	障害者	外国人	保育士	乳幼児
H4	1年用	15	1	3	0	7	4	0	5	7	6	0	0	0	0
H4	2年用	4	0	0	2	2	0	3	9	15	3	0	0	1	0
H14	上巻	12	1	0	0	1	4	2	4	12	15	1	2	0	5
H14	下巻	2	0	2	8	3	2	0	2	28	18	3	1	2	7

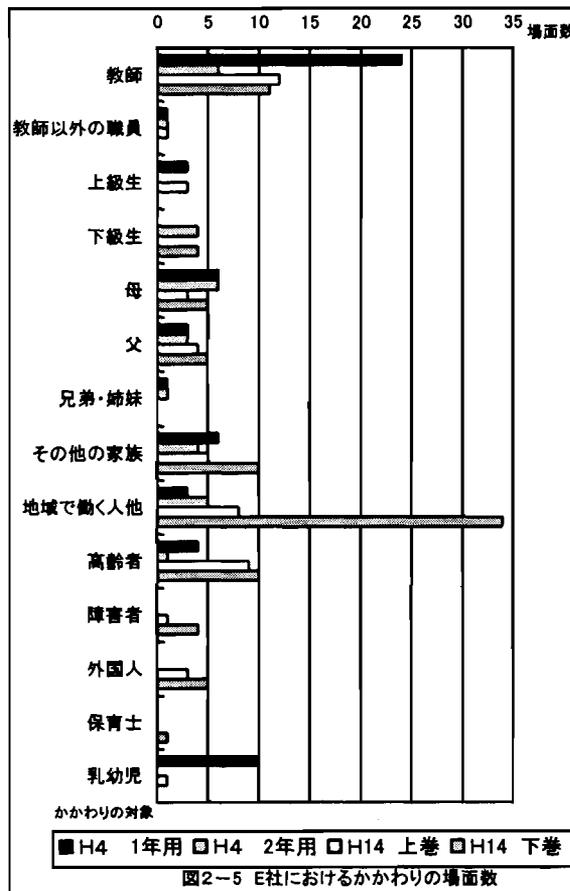
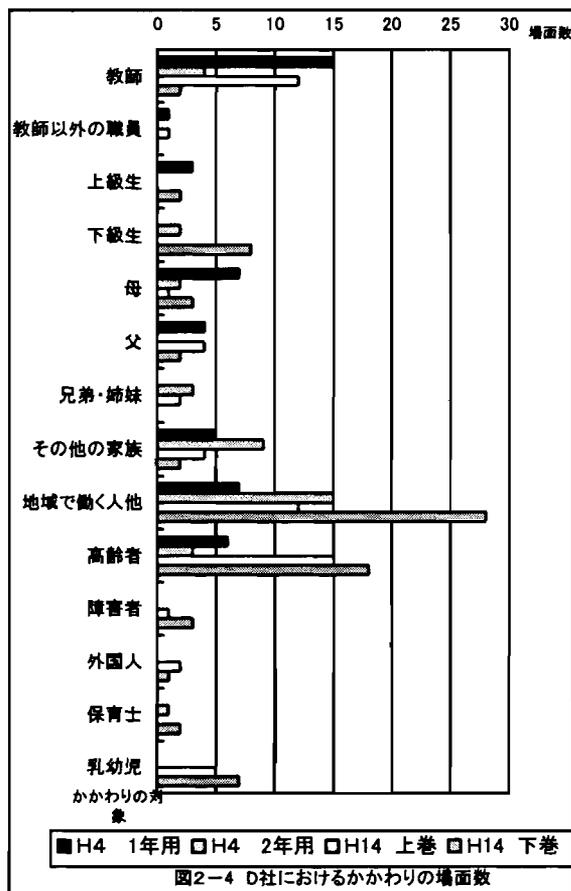
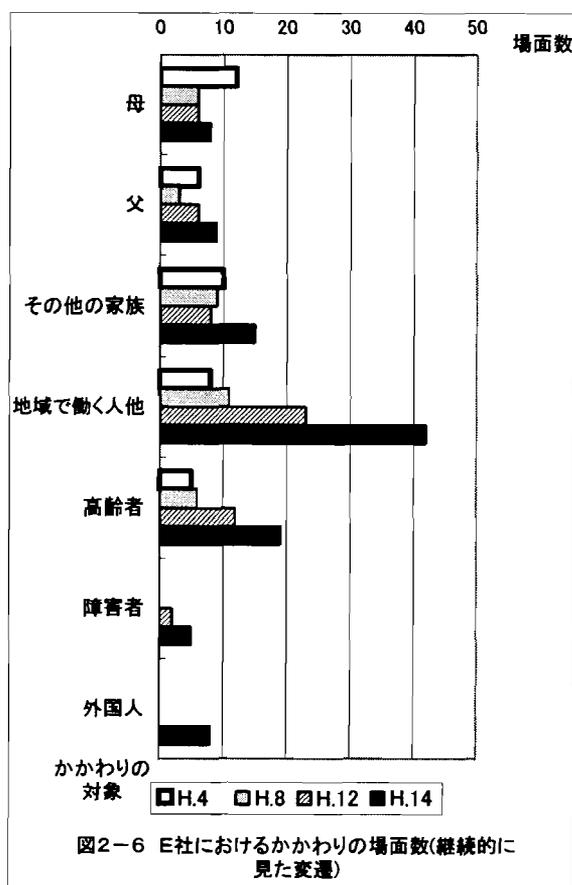


表2-5 E社におけるかかわりの場面数

象	かかわりの対	教師	員	教師以外の職	上級生	下級生	母	父	姉妹・兄弟	その他の家族	他	地域で働く人	高齢者	障害者	外国人	保育士	乳幼児
H4	1年用	24	1	3	0	6	3	1	6	3	4	0	0	0	0	10	
H4	2年用	6	1	0	4	6	3	1	4	5	1	0	0	0	0	0	
H8	1年用	15	2	1	0	4	2	1	4	3	3	0	0	0	0	0	
H8	2年用	10	0	0	6	2	1	4	5	8	3	0	0	0	0	0	
H12	1年用	16	1	2	0	1	4	0	3	9	8	1	0	0	0	2	
H12	2年用	10	0	0	9	5	2	3	5	14	4	1	0	1	0	0	
H14	上巻	12	1	3	0	3	4	0	5	8	9	1	3	0	0	1	
H14	下巻	11	0	0	4	5	5	0	10	34	10	4	5	1	0	0	



オ. E社

E社については、平成4年度用及び平成14年度用教科書の比較だけでなく、平成4、8、12、14年度用と年ごとに分析することによって、教科書における身近な人々とのかかわりの変遷を追うことにした。図2-5は他社と同様、平成4年度用と平成14年度用の生活科教科書における人とのかかわりの場面数を比較したものである。図2-6は継続的な調査で場面数の変化が顕著なもの（母、父、その他の家族、地域で働く人他、高齢者、障害者、外国人）を2学年分まとめて図に表したものである。表2-5及び図2-6より、E社は、平成4年度用教科書から平成8年度用、12年度用、14年度用へと、地域で働く人他及び高齢者とのかかわりの場面数が教科書改訂の度に増加している。特に地域で働く人他については、平成4年度用に比べて平成14年度用では大幅に増加している。また、障害者とのかかわりの場面は平成12年度用から、外国人とのかかわりは平成14年度用から登場しており、これら2者とのかかわりの場面が教科書上で必要とされるようになったのは近年になってからであると考えられる。以上より、身近な地域の人とのかかわりは、教科書改訂の度に重要視されてきており、特に学習指導要領改訂後の平成14年度用教科書になってその傾向が顕著に見られ、学習指導要領の改訂に伴い、教科書上で身近な地域の人とのかかわりをこれまで以上に重要視するようになったと考えられる。父母とのかかわりの場面数については、平成4年度用では母とのかかわり

の方が多かったが、平成12年度用では両者の差がなくなり、さらに平成14年度用では父とのかかわりの方が多くなっている。よってE社についても他社と同様に、男女平等を意識し、父親の役割にも重点を置くようになっていけると言える。さらに、平成14年度用教科書でその他の家族とのかかわりの場面数が増加していることより、家庭生活、家庭の役割の重要性を強調していると考えられる。

#### 4 今後の教科書の在り方への提案

以上の分析結果と考察を踏まえ、今後の教科書の在り方への若干の提案をしたい。

まず、全体的傾向として身近な地域の人とのかかわりが各社ともに増加していることは高く評価できると考える。地域社会の連帯感の希薄化が問題視される今日において、身近な地域の人とのかかわりは欠かせないことであり、そのかかわりの場면을教科書に多く掲載することで、子どもに身近な地域の人とのかかわりを意識化させるきっかけとなると考える。ただ、地域で働く人他とのかかわりの場面数に比べて、高齢者、障害者及び外国人とのかかわりの場面数は増加したもののまだ少ない教科書もあり、子どもがそれらの人々をより身近に感じられるように、あらゆる場面を通して今後より増加させることが望まれる。その際、子どもから声をかける場面も多く掲載させるべきだと考える。そうすることにより、教科書を見た子どもは、「自分も声をかけよう」という意欲が高まると考えるからである。また、地域で働く人他や高齢者とのかかわりの場面数の合計が多くても、1つの大単元に集中していることもある。人とのかかわりは、ある一定の時間のみでなく、長期にわたり継続的に行われるべきである。継続的にかかわるには多くの単元にその場면을掲載し、単元による場面数の極端な偏りを減らすことが必要だと考える。さらに、双方向性のあるかかわりの場면을増加させることが必要だと考える。そうすることにより、人とのかかわりが深まり、何度も繰り返し応答する中で、様々な気づきが生まれることが期待できる。例えば、子どもが農家の人と出会った時、挨拶をするだけで終わるのではなく、そこから会話が生まれ、やがて様々な知識や技術を教えてもらえるようになるような場面が教科書に掲載されていたら、教科書を見た子どもはわくわくしてくるのではないだろうか。

次に、父母とのかかわりについては、今後ますます男女平等意識を高めていくにあたり、父とのかかわりの場面数が増加していることは高く評価できると考える。今後もこの傾向が続くことが望まれる。

異年齢の子ども同士のかかわりについては、各社ばらつきがあり、平成4年度用教科書から平成14年度用へと、場面数が減少しているものもある。また、かか

わりの対象も各社によって重点を置くところが異なる。しかし、各社ともにより異年齢の子ども同士のかかわりを重要視するべきだと考える。少子高齢社会が急速に進行する中、同学年の子ども同士のかかわりだけでは十分なものとはならないと考える。また、乳幼児や下級生とのかかわりは、自分の成長に気付くことができるという利点をもつ。その理由は、乳幼児や下級生は、子どもにとって数年前の自分の姿であり、そのかかわりを通して、「こんなことができるようになった」などといったことに気付くことができるからである。また、上級生とのかかわりもより増加させることが望まれる。上級生は子どもにとって憧れであり、「自分もあんなことができるようになりたい」などといった期待をもつことができるからである。さらに小学生に限らず、中学生や高校生、さらには大学生とのかかわりの場面も教科書に掲載させれば、子どもの期待感は一層大きくなり、活動の幅も広がっていくと考える。

各社ともに、重点を置くかかわりの対象は異なっている部分も多々あり、それぞれの特徴が表れていると言える。子どもは多様な人とかかわることによって、多様な考え方、つまり個性に気づき、尊重するようになる。さらに、知らなかったことを教わり、学びが深まっていくと考える。今後もより幅広く多様な人とのかかわりの場面を大切にするべきだと考える。

本稿で分析に使用した教科書

- 平成4年度用「小学校 せいかつ」1年・2年（学校図書）  
平成14年度用「みんなと学ぶ 小学校 せいかつ」上・下（学校図書）
- 平成4年度用「せいかつか なかよし」1年・2年（教育出版）  
平成14年度用「せいかつ 上・そよかせ 下・ひだまり」（教育出版）
- 平成4年度用「生活」1年・2年（啓林館）  
平成14年度用「生活 上・わくわくせいかつ 下・いきいきせいかつ」（啓林館）
- 平成4年度用「新しい生活」1・2（東京書籍）  
平成14年度用「あたらしいせいかつ」1・2上・下（東京書籍）
- 平成4年度用「たのしいせいかつ」1年・2年（大日本図書）  
平成8年度用「たのしいせいかつ」1・2（大日本図書）  
平成12年度用「たのしいせいかつ」1年・2年（大日本図書）  
平成14年度用「たのしいせいかつ」上 なかよし・下 だいすき（大日本図書）

<参考文献>

- ・外池 智「生活科教科書にみられる『遊び』の特性―場所, 対象, 活動を視点として―」せいかつか 第5号1998, 初教出版, 1998年, PP.66-73